

小児のリウマチ性疾患

座長：渡 部 昌 平

小児のリウマチ性疾患は比較的稀であり、日常診療上遭遇することは多くはない。しかしながら若年性特発性関節炎 (Juvenile Idiopathic Arthritis : JIA) をはじめとする小児の関節疾患は骨・関節破壊が進行して日常生活動作にも支障をきたす症例が少なからず存在し、一旦関節破壊に至ったケースでは患児の生涯にわたる生活様態に強く影響を及ぼす。本セッションでは JIA 4 題、単純性股関節炎 1 題、血友病性関節症 1 題、計 6 題であり、小児の関節炎・関節症について疫学、診断あるいは治療について貴重な報告されたのでその概略について紹介する。

松山市民病院小児科の中野らは急速に骨変化をきたした少関節型 JIA の症例を報告した。少関節型ではあるが RF 陽性、抗 CCP 抗体高値であった。骨・関節破壊の進行が急速であったので生物学的製剤を使用した結果、症状は改善し関節炎の寛解が得られたという報告であった。本来、少関節型 JIA は予後良好で関節破壊に至ることは少ないが、RF 陽性、抗 CCP 抗体高値の症例では留意することが喚起された。

日本大学整形外科の根本らは JIA に対する人工関節置換術の成績について発表した。最近では積極的な薬物療法の導入により JIA の手術治療は減少してきている。しかしながら保存療法に抵抗する症例や高度な関節破壊に伴う ADL の低下がみられる症例に対しては年齢を制限せず手術療法も考慮されるべきであるという趣旨であった。

横浜市立大学整形外科の稲葉らは全身型若年性特発性関節炎 (s-JIA) の大関節に対するトシリズマブの関節破壊抑制効果について発表した。トシリズマブを s-JIA 患者に対して投与した結果、臨床的また検査データの改善が得られたことを示しその有用性を報告した。特に股関節などの大関節の観察では X 線学的に修復されたことは注目される。

千葉県こども病院整形外科の赤木らは近県 3 施設における単純性股関節炎発症時期を検討した。単純性股関節炎は 8 月の発症が多く 2 月に少ない傾向が認められた。このことから原因としてウィルス感染が考えられた。しかしながら年度毎の調査では一定の傾向があるとは言い難く更なる検討が必要という発表であった。

奈良県立医科大学整形外科の富和らは軟骨無形成症を伴った血友病性膝関節症に対し鏡視下滑膜切除術を施行した症例について報告した。鏡視下滑膜切除術により関節内出血から関節症に至る悪循環を絶つことができ成長とともに内反膝も改善したことを示した。軟骨無形成症と血友病との関連は明らかではないが、関節に対する迅速な対応により予後の改善が期待できるという趣旨であった。

愛媛大学大学院医学研究科運動器学の渡部らは少関節型 JIA に対する鏡視下滑膜切除術の有用性について報告した。少関節型 JIA は診断に難渋することが稀ではない。単関節炎で発症した JIA の 2 症例に対して鏡視下滑膜切除術 (arthroscopic synovectomy : AS) を行った。診断のみならず治療の上でも少関節型 JIA に対する鏡視下滑膜切除術は有用であったという内容であった。